

仏教は山に何をしたか？

——アムド地方の聖山巡礼における仏教化の研究——

別所 裕介

1 はじめに

本稿は、これまで後期密教の「マンダラ」に範をとる世界観の基準によって一本化されてきた「仏教化 (Buddhification)」理論について、その中核となる「山神」⁽¹⁾の本質をめぐる議論から出発し、先行研究とは異なる見地から、仏教化について独自の解釈を提示するものである。なお研究方法として、アムド地方最大の聖山である「アニ・マチェン (A myes rma chen)」を取り上げ、2002 年夏から 2003 年夏にかけてこの山で行なった計 3 回のフィールドワークから得られた資料と、アニ・マチェン巡礼の指南書である「聖地誌 (gnas yig)」⁽²⁾から読み取れる情報とを組み合わせることで論述を構成する。

チベットにおいて山神とは、過去に実在した氏族の長などをその死後、氏族内で継承される一定の境域の守護神 (yul lha) として特定の山に祀り、山そのものを死者の「墓標」かつ「よりしろ」として崇める祖霊信仰の一形態である。従来の先行研究は、このチベット固有の山神崇拝の基層的特質が、不殺生や現世放棄など仏教的価値規範によって塗り替えられていく過程を「仏教化」と呼び、ヴェーダ的伝統への同化現象である「サンスクリット化 (Sanskritization)」に對置して論じた (Macdonald 1990)。

なかでも K. Buffetrille や T. Huber は、この仏教化を具体的に捉える手法として、チベットの山岳信仰が「ラリ (bla ri)」と呼ばれる祖先の山への供養祭祀と、「ニーリ (gnas ri)」と呼ばれる仏教聖山への右繞巡礼の 2 系列に分類されることに注目し、“ラリからニーリへの変容”が「マンダラ化 (Mandalization)」によって組織的に引き起こされる仕組みを検証した (Buffetrille 1998; Huber 1999)。

マンダラ化とは、それまで土着信仰の対象であった山岳が、密教神格の「本地」と見なされることで、山全体が天然のマンダラへと変貌していく現象である (Grapard 1982)。通常チベットでは、特定の山の神が「サンヴァラ・マンダラ」の主尊「デムチョク (bDe mchog)」に見立てられ、これを中心として全体の景観がシンメトリックなマンダラ構造に還元されていくため、それまでの対面的な祖先供養の儀礼が円運動 (skor) を伴う帰依の作法へと移り変わり、最終的に山を訪れるものは「寺院にいるときと同様の」(Buffetrille 1998, 24) 儀礼作法を要求されるようになる。これらのマンダラ化された同質的な空間構造をもつ聖地は、「24 のピータ (pīṭha)」と呼ばれるインドの遍歴伝統を継承する新たな宗教ムーブメントとして、ミラレパ (Mi la ras pa, 1040–1123) など中世のカリスマ的遊行者、およびこれに追随する世俗者による巡礼活動によって広域的ネットワークを構築し、ヒマラヤの北側に確固たる仏教文化圏を形成する礎を築くことになった (Huber 1999, 23–29)。

—仏教は山に何をしたか?—

以上の研究成果は、多元的文化複合社会における変容の力学を的確に捉えており、ヒンドゥーイズムとの対峙を迫られてきたヒマラヤ地域における有力な分析枠組みとなったものの、インド世界と隣接していなかったカムやアムド地方における山岳信仰の実情までをカバーするものではなかった⁽³⁾。実際に、古代の氏族制社会における最高神の地位にあった山神が、外来の仏教によって広く末端まで征服されていく過程は、古代ヤルルン王家からグライラマ政庁にいたる中央チベットの政治体制の伸張と密接なかかわりを持ち、「少なくともツォンカパの出現まで」(Karmay 1996, 66)⁽⁴⁾中央の政体に意識されることのなかったアニ・マチェンの主神「マジャル・ポムラ (rMa rgyal spom ra)」など辺境地区の山神は、かなり遅い段階まで後期密教の洗礼を受けることなく、在地社会独自の宗教伝統の中に放置されてきたことが推測される。

また教派分布的に見ても、ミラレパやゴーツァンパ (rGod tshang pa, 1189-1258) を輩出し、新訳タントラ思想の導入と民間への定着に重要な役割を果たしたカギュ派や、サンヴァラ系タントラを重視したゲルク派が精力的に活動した中央チベットに比べ、カム北部やアムド南部では、デルゲの独立王権と結びついたニンマ派の伝統が色濃く残り、これらの地方におけるその主導的立場は現在も変わっていない⁽⁵⁾。こうした教派勢力が、それまで独自の路線で把握してきた自分たちの「聖山」を、わざわざ後発の思潮である「デムチョク・カルト」に明け渡す必然性があるとは思えない⁽⁶⁾。

こうした背景から、従来デムチョクという単一の神格による仏教化を模索してきた先行研究に対し、教派勢力の分布や在地の社会構造に留意した、よりローカルなモデル構築が必要であると考え。本稿ではそうした試みのひとつとして、ニンマ派の行者が著した聖地誌からアニ・マチェンを扱ったものを取り上げ、そこに見られるマジャル・ポムラ山神への独自の意味付けに注目することで、従来とは異なる視点から巡礼活動を再考するものである。

なお、本稿でカタカナ表記される霊跡名および人名は、テーマとなっているアニ・マチェン山ゴロク地方の牧畜民が使うアムド方言の発音に準拠した便宜的なものであることをお断りしておきたい。

2 調査地の概要と聖山巡礼のプロセス

現行の地理区分で言うアニ・マチェンとは、中国青海省の南部、黄河源流域を占めるゴロク・チベット族自治州の北部に位置する 6000m 級の山群である。聖山アニ・マチェンの主神であるマジャル・ポムラは、この山群の主峰 (6282 m) と第 II 峰 (6268 m) の中間にある雪のドーム (6080m) そのものとされている。主峰部北端のドルジェ・ジャクジャルマ峰 (rDo rje drag rgyal ma, 5911 m) はマジャル・ポムラの母親とされ、南端のチュプタ・デョシル峰 (Chibs rta gro zhur, 5690 m) はマジャル・ポムラが騎乗する駿馬であるという。主峰部近辺にはこれ以外にも多くの人格山が確認され、世俗の社会組織に範をとる擬似的な親族体系および主従関係によって、アニ・マチェン山域全体がマジャル・ポムラを中心

——仏教は山に何をしたか？——

とする王国を構成している⁽⁷⁾。巡礼はこの主峰部をすっぽりと囲む全長約 180Km の巡礼路を 7 日間前後かけて一周する。彼らはその間さまざまな宗教的霊力をプールした場所＝「霊跡 (gnas)」に遭遇し、これに接触儀礼や供儀を行う。

ここでは、筆者が 2002 年の午年巡礼に参加して得たフィールドデータを中心に、主だった霊跡 17 箇所を抜き出した上で、そこでの儀礼行動について概要を述べる。

1. ツアルナク・カムド (mTshal snag kha mdo) : ゴロク以南の地から来る巡礼者の起点となる場所。山神の供儀所となる「ラツェ (la btse)」と香台が設置してある。巡礼はここで車を降り、サンを焚いたりルンタを撒いたりして旅の安全を祈る。事後溪谷の上部を目指して出発する。
2. メンチュ (sMan chu) : しばらく歩くと、興海の活仏ニージ・デュブチェン (gNas bzhi grub chen) が啓示 (brda yig) にもとづき 1990 年に発見した複数の泉が湧く河原に出る。胃腸、呼吸器などの病に薬効があるとされ、巡礼はここでこれらの聖水を摂取する。
3. ルドン・ヒュクパ (Klu sdong shug pa) : さらに溪谷を上ると、河の対岸の土手に「一本杉」と「洞穴」から成る霊場が見える。巡礼は洞穴内に潜り込んで礼拝し、手鏡や紙幣などの供物を置く。
4. タムチョク (rTa mchog) : 主峰部を一望にできるアニ・マチェン西側の峠 (4580 m)。ラツェと馬供養の経典 (rta gzungs sde lnga) を刻んだマニ塚がある。正面のマジャル・ポムラ峰と、その愛馬とされる右方のチュプタ・ヂョシュ峰に対してサンを焚き、ルンタを撒きながら経文を唱える。事故や病気などで馬を立て続けに失った牧民は、ここに馬の頭骨と尻毛を置いて死馬を回向することで、次回には良馬を授かるという。
5. アマ・ゴクザ (A ma 'gog bza') の岩 : 民間伝承中の英雄「ケサル王」⁽⁸⁾の母、ゴクザの生誕地とされる場所にある巨岩。巡礼は岩の表面に紙幣などさまざまな供物を張り付ける。
6. モワ・トワ (Mo ba gto pa) : マジャル・ポムラの王国専属の占い師と呪術師が化身したとされる岩山。ふもとに遊行僧シャブカル (Zhabs dkar Tshogs drug rang grol, 1781-1851) が滞在したという修行洞があり、現在そこに祠が建てられつつある。
7. ジャツァ (rGya tsha) の帽子 : ケサルの異母兄ジャツァ・シャルカル (rgya tsha zhal dkar)⁽⁹⁾が被っていた帽子とされる白い巨岩。岩の上に巡礼者が被っていた帽子がたくさん置きざりにされている。岩を削ってその破片を持ち帰ろうとする者もいる。
8. シェマ・デュデ (Bye ma 'bru de) : 「砂の糶秣」の意。その名の通り、河原一面に点在する無数の砂山がそれぞれ無造作に盛られた穀物の堆積のように見える。地元民が伝える神話によるとこの砂山は、地理的にマジャル・ポムラ峰と向かい合う「伯父山」(地図参照) が、インド巡礼にあこがれて西へ向かおうとしたマジャル・ポムラを引き止めたあと、眼前に積み上げた 5 種の穀物と宝物であるとされる。巡礼はこの神話にあやかり、五穀と五種の宝玉を布袋に詰めて加持した儀礼アイテム「テルク (gter khu)」をこの丘に埋め、マジャル・ポムラの歡心を買うことで、自己の財運の向上をはかろうと

—仏教は山に何をしたか?—

する。

9. ギョミ・ギョプチュ (sGrol ma'i grub chu) : 婦人病に効くという岩清水。特に子に恵まれない婦人がここで儀礼的に沐浴すると子が授かるという。皆がペットボトルなどに水を汲んでいく。
10. グーク (Gos sku) : 絹織りの巨大タンカ、あるいは宮殿正門にかかる帳ともいう砂礫の土手。巡礼は土手を登り、かつて行者がいたという岩室に入って礼拝する。
11. シャブカルの足跡 (Zhabs dkar pa'i zhabs rjes) : シャブカルが巡礼中、獐猛な野生ヤクと遭遇した際に、とっさに飛び乗った巨岩であり、岩上にはそのとき焼きついた聖者の足跡とされるくぼみが残っている。巡礼は岩によじ上ってくぼみに額づき、バターを塗りつけたりする。
12. ジョモ・ヤンラ (Jo mo g-yang ra) : 「地獄めぐり」の霊場。巡礼はここで岩石を背負ったり、岩の隙間をくぐったりする儀礼にいそしむ。上部にはケサル王の神馬と神犬の足跡が見られる。
13. チャンドウル・ラツェ (dGra 'dul la btse) : マジャル・ポムラの弟山のふもとにあるラツェ。礎石にケサルの手と足の跡が残っており、皆がこれに礼拝する。弟山の山すそにはグル寺の伽藍がある。ここは西側ルートの起点となるため、北部から訪れる人の波がひきもきらない。
14. ギョクドウ ('Brog bsdu) : アニ・マチェン北側の最高地点 (4600 m) となる峠。マジャル・ポムラの母とされる雪峰が眼前にそびえ、巡礼はラツェをめぐる福祿を祈願する。峠までの途上「リン国の馬囲い (gling gi rta ra)」、ケサルの「魔法の馬鞭 (bsam pa'i don grub)」、「ヂュグモ (ケサル妃) のチュラタン ('brug mo'i chu ra thang)」などが分布する。
15. チュ・カルナ (Chu dkar sna) : 仏塔と山神廟が建てられており、裏山に鳥葬場がある。巡礼者はこれらの宗教施設をめぐる、鳥葬場の解体まな板の上で「チュー (gcod)」の真似事をしたりする。
16. ゴツォン (Go mtshon) : ここにはケサルと三十将の甲冑と武器が埋蔵されていると伝えられ、またふもとの岩場にジャツァのものとされる手形が見られる。巡礼は岩壁に様々な供物を貼り付け、くぼみに向かって礼拝する。
17. リンリ・セルウォ (Gling ri gser po) : この山はリン国の守護山であるとされ、ケサルと臣下の三十将軍はここで大規模な「ラサン (lha bsang)」を催し、諸方の神々に人類の安寧を祈願したとされる。巡礼はここでケサル王に対しサンを焚くなど供儀を行ない、さらにここから 10Km ほど歩いて出発地点のツアルナク・カムドに帰着する。

以上がアニ・マチェン巡礼で観察される儀礼行為の概要であるが、多くの霊跡には近在の住民に古くから（少なくとも文化大革命以前から）共有される言い伝えがあらかじめ存在し、それらが巡礼者間で広く伝達されることで、実際の現場における儀礼行動の「型」を決めている。では、地元に根付いたニンマ派の宗教者の眼には、これらの儀礼が行われる聖域

全体の景観はどのように映っているのでしょうか。

3 アニ・マチェン巡礼の聖地誌

アニ・マチェンをめぐって書かれた聖地誌は、ヴァイローチャナ (Vairocana, 8c) 作とされる古いものから、文化大革命以降に書かれた現役の僧侶によるものまで、長いスパンで書き継がれてきているが、この中から特にニンマ派の系統で書かれたものとして本稿で取り上げるのは、アニ・マチェンのふもとにあるデルゲ・ゾクチェン僧院 (rDzogs chen dgon pa) の分院「グル寺」の先代座主であり、半僧半俗の在家行者でもあったグルラマ・トゥプタン・ツェルン (dGu ru bla ma Thub bstan tshe ring, 1921–94) によって書かれた聖地誌『十地の大自在天マジャル・ポムラの御在所の莊嚴簡略、明知変化の鏡』(*Sa bcu'i dbang phyug chen po yul skyong rma rgyal sbom ra'i gnas kyi bkod pa rags bsodus kun gsal 'phrul gyi me long*) である。所収は O rgyan bsod nams and A bu dkar lo (Eds.) 2002, pp.91–110 であり、これは巡礼が集中する 2002 年の午年 (午はマジャル・ポムラの干支) をにらんで、ゴロクのニンマ派僧院から刊行された商業的出版物 (定価 9 元) である。紙幅の都合により、本稿ではこのグルラマ作の聖地誌から、マジャル・ポムラの姿形に関する情報を中心に抜き出して紹介する。テキスト本体は 5 つのパートに分かれ、まずはじめにアニ・マチェン主峰部の景観について述べ、さらにこれを「四種法 (las bzhi)」⁽¹⁰⁾ の概念に対応する東西南北の各方位から描写する構成を取っている。

第 1 パートはアニ・マチェン主峰部全体を山神の宮殿と見なし、「十地の大菩薩 (sa bcu'i dbang phyug chen po)」⁽¹¹⁾ のタイトルを与えられたマジャル・ポムラおよび密教神格として粉飾された父母や后などが宮中に住まう様子が描かれている。本文には

四種法変幻の雲中から

へだてなく有情利益の雨行き渡らせる

十地の大自在天ポムラ王

... (中略) ...

戦神⁽¹²⁾の王威勢大自在

十地の菩薩マジャル・ポムラ (dGu ru bla ma 2002, 91–92)⁽¹³⁾。

などの描写があり、マジャル・ポムラが単なる土着の山神ではなく、輪廻を超越した高位神であることが強調されている。

第 2 パートは東側からの視角である。ここでのマジャル・ポムラは袈裟をまとった「柔和 (zhi ba)」な比丘 (dge slong) 形で描かれる。

ここに東方の稀有なる莊嚴は

チュカル・ナとリンリ・セルの間

東に鎮座される柔和なマチェンは

白い御体に美しい姿態、うりざね顔

——仏教は山に何をしたか？——

脚ははだして法衣・法裙を着て

禅杖を持ち鉢を手に携えて

比丘装束で立つ風情でおられる (dGu ru bla ma 2002, 95–96)⁽¹⁴⁾。

第3パートは南からの描写で、マジアル・ポムラは「完全 (rgyas pa)」で雅やかな騎上の王として描かれる。

そこから南の方角の地の莊嚴は

リンリの境からタムチョク峠の間

南を掌握する完全なマチェンが

白い玉体、右手に白い旗鉾を

掲げて左手で珠寶をみぞおちに持ち

乗騎に金の鞍、トルコ石のくつわをつけて

臙脂色の駿馬に乗って威光そのもの

雄大な王が座す所作は雅やかである (dGu ru bla ma 2002, 98–99)⁽¹⁵⁾。

また

ドカム・リンの神山セルウオありて

密教三部変化のノルブ・ヂャンドウル⁽¹⁶⁾を

三十将軍、十三戦神と

五守舎神の集団が囲んでいる (dGu ru bla ma 2002, 99)⁽¹⁷⁾。

の記述によって、民間叙事詩『ケサル王伝』の主人公ケサルとその一族がリストアップされている。

第4パートは西側である。第1パートの中央宮殿が西側からの景観であるため、ここではマジアル・ポムラは登場せず、代わりにタムチョク峠上空に終結する「世間八部」系列の護法神群が描かれる。その中にはマジアル・ポムラの9男9女、「十三戦神」と「十五ウェルマ (wer ma)」⁽¹⁸⁾などが含まれている。またアニ・マチェン西側にある複数の霊跡の景観が描かれる。

シェマ・ヂュデというそこには

五種の糧食と宝珠の群集を

いっぱいに入れたテルマの如意瓶

これらは御意にかなう祭祀のもの

ジョモ・ヤンラというツアリ (Tsa ri) の地

聖なる地インドのダキマ

カンジョ・ザンモ (mKha' 'gro bzang mo) の最殊勝禅洞

成就者タントン (= Thang ston rgyal po, 1361–1485) とラロン・ハルド (= lHa lung

——仏教は山に何をしたか？——

dpal gyi rdo rje, 9c) の

頭と手の跡などはっきりと出ている (dGu ru bla ma 2002, 105–106)⁽¹⁹⁾。

最後の第5パートは北側である。ここでは「勇猛 (drag po)」な戦神姿のマジャル・ポムラとその弟ヂャンドウル・ワンシュク (dGra 'dul dbang phyug) が登場する。

そして北の地の荘厳これみると

ヂャンドウル・ニー (dGra 'dul gnas) からチュカル・チョルテン (Chu dkar mchod rten) の間

勇武の所作をもって北のマチェンは

白人、青馬で旗鉾と投げ縄をもち

戦神の英雄の装い全て身に付け

戦神の精鋭ヂャンドウル・ワンシュクは

赤銅色の御体、右手に旗鉾を掲げ

左手に投げ縄、宝珠の器を持ち

金の鎧兜に旗を飾り

戦神の9つの装備を身に付けて黒馬を駆る (dGu ru bla ma 2002, 106–107)⁽²⁰⁾。

4 統合と分析

以下では、聖地誌から明らかになった聖地の宗教的なイメージと、実際の霊跡で観察された儀礼行動とをつきあわせ、その相関について検討したい。まず、グルラマの聖地誌が示す内容は、以下のような点で実際の儀礼内容との対応性をもっている。

- 1) ケサル王についての言及：フィールドデータから明らかなように、巡礼活動全般を通して、現場での儀礼対象はケサル関連のものが圧倒的なウェイトを占めている。そもそも、民間叙事詩の世界では、ケサルとマジャル・ポムラとは分かちがたい紐帯によって結ばれている。物語の舞台であるリン国の王ケサルは、黄河源流域全体の守護神であるマジャル・ポムラに自分の「命魂」(bla)を託しており、その霊的守護を受けているため、雨あられの矢を浴びても傷ひとつ負わず、向かうところ敵なしの武勇を誇っている(石泰安 1993, 164)。リンが他国と戦に及ぶ際には、将兵は大戦神マジャル・ポムラに供儀を捧げ、その加護を祈念する祭事を盛大に執り行う。またリン国軍が苦境に陥った時は、マジャル・ポムラ自らが白馬の武者に化身して馳せ参じ、これを援けることもある(何峰 1995, 288–289)。物語中で示されるこのような英雄と山神の「供儀—守護」を通じた関係は、アニ・マチェンを宗教的に描写しようとする宗教者にとっても欠かせない要素であり、グルラマは聖域の南側にケサル一族が集結している様子を示すことで、マジャル・ポムラをめぐる宗教世界にケサル王が参画していることを印象付けている。
- 2) タムチョク峠の描写：このようなケサルとマジャル・ポムラの“一蓮托生”の関係を、「供儀—守護」を通じて個々の巡礼者とマジャル・ポムラとの間に成立させているのが、

巡礼中最もアニ・マチェン主峰部に接近できる地点となる西側の峠、タムチョクにおける儀礼である。実際の儀礼過程では、巡礼者はこの峠でマジアル・ポムラに供養を行うとともに、馬を引いてマニ塚を周回し、死んだ自分の愛馬を供養することで、特に馬についての山神の加護を期待する。一方聖地誌では、タムチョク上空に「十三戦神」(dgra lha bcu gsum) や「ウェルマ」(wer ma) などの守護神が無数にいる様が描写されている。再びケサルを引用するが、ケサル王の騎乗馬は十三戦神やウェルマをその体軀の各部位に宿した神馬であり、彼はしばしばこれを称える歌を詠じる⁽²¹⁾。ここから民間では、強壯で俊敏な馬ほど多くの守護神を宿していると思われており、聖地誌で示される神格描写も、こうした民間の観念に寄り添うものとなっている。

- 3) 山神神話との関連：さらに巡礼者は西側の埋蔵スポットであるシェマ・ヂュデにおいて持参したテルクを埋蔵し、マジアル・ポムラの歓心を買うことで、特に財運に関しての加護が得られることを期待する。グルラマは聖地誌の中でこの霊跡に触れ、「御意にかなう祭祀のもの」という記述によって、この場所が神話時代から祝福された場所であることを強調している。また本文中の随所でマジアル・ポムラの王国を構成する親族山や家臣山の名をあげており、この点でも山神神話をめぐる民間の思惟方式に寄り添った景観描写を心がけていることが見て取れる。

以上、グルラマの聖地誌が、基本的にインドの仏神で構成され、シンメトリックな均質性を重んじるマンダラ・モデルのそれとは異なり、「マジアル・ポムラの王国」という固有の概念に立脚した上で、その中に包み込まれたケサルや山神神話などの民俗的要素を意識的に取り入れていることが明らかになった。アニ・マチェンを訪れる巡礼者は神話伝承の世界に身をゆだねてマジアル・ポムラとの「供養—守護」関係を構築しようとし、グルラマはそうした民間の世俗的な志向性に歩み寄る一方で、これらの儀礼の中核となるマジアル・ポムラを「十地の大菩薩」と位置付けることにより、儀礼全体を単なる土着の山神崇拝にとどまらない信仰活動へと昇華させようとしているように見える。

5 まとめ

本稿では、ニンマ派系統の聖地誌に依拠することによって、四面四相の大菩薩マジアル・ポムラが主宰する仏教事業という、固有の宗教的世界観にのっとった儀礼分析が可能となった。そこでは、先行研究で扱われてきたようなマンダラをモチーフとした聖地誌に比べ、民間の思惟方式に寄り添う形を持って聖域を描写する局面が多く見られた。アニ・マチェン周域の宗教勢力にとって、本来自分たちの伝統とは一線を画すデムチョクに聖域の主神の座を明け渡すということは、「ケサルの守護神」であり、「王国の支配者」であるという固有の背景を持つマジアル・ポムラが、マンダラ化のパターンによって没個性化されてしまうことを意味する。アニ・マチェンを中心としてこの地域に根を張るニンマ派教団の立場からすれば、聖域の主役はあくまでも新奇な「デムチョク」ではなく、伝統的な「マジアル・ポムラ」のままであるほうが望ましい。しかし仏教の「世間神に帰依してはならない」という基本原

—仏教は山に何をしたか?—

則から、土着の山神をそのまま崇拝するわけにも行かない。聖地誌中で強調される「四種法を主宰する十地の大菩薩」というタイトルは、こうしたタブーを乗り越えると同時に、もともとの在地の文化伝統をもそのまま維持することのできる、一石二鳥のポジションであるといえよう。

結果としてアニ・マチェンにおいては、ケサルや山神神話などのバックボーンがあるかぎり、山はマンダラ型の仏教化を阻害されることになる。アニ・マチェンを筆頭とするアムド地方の聖地・聖山研究においては、マンダラのような高度な象徴体系をいわゆる「土着伝統」の上から覆いかぶせることで「ラリからニーリへの移行」を図ろうとする画一的な過程だけでなく、「四種法」や「十地菩薩」といった王朝期から使われてきた古いターム⁽²²⁾によって、山神の地位を「下から押し上げる」ことで同様の目的を達しようとする、「もうひとつの仏教化」運動にも着目する必要があるのではないだろうか。

文献表

Brag dgon pa dKon mchog bstan pa rab rgyas

1982 *mDo smad Chos 'byung*. Lanzhou: Kan su'u mi rigs dbe skrun khang.

Buffetrille, K.

1994 "A Bonpo Pilgrimage Guide to Amnye Machen Mountain." *Lungta*. 8, pp.20-24.

1997 "The Great Pilgrimage of Amyes rma chen: Written Tradition, Living Realities." In *Mandala and Landscape*. (Emerging Perceptions in Buddhist Studies: No.6) . Ed. A.W. Macdonald. New Delhi: D.K.Printworld. pp.75-132.

1998 "Reflections on Pilgrimages to Sacred Mountains, Lakes and Caves." In Mckay 1998. pp.18-34.

Grapard, A.G.

1982 "Flying Mountains and Walkers of Emptiness: Toward a Definition of Sacred Space in Japanese Religions." *History of Religions*. 21-3, pp.195-221.

dGu ru bla ma Thub bstan tshe ring

2002 "Sa bcu'i dbang phyug chen po yul skyong rma rgyal sbom ra'i gnas kyi bkod pa rags bsdus kun gsal 'phrul gyi me long zhes bya ba bzhugs so." In O rgyan bsod nams and A bu dkar lo, pp.91-110.

Huber, T.

1999 *The Cult of Pure Crystal Mountain: Popular Pilgrimage and Visionary Landscape in Southeast Tibet*. New York: Oxford University Press.

——仏教は山に何をしたか？——

Karmay, Samten G.

- 1996 "The Tibetan Cult of Mountain Deities and its Political Significance" In *Reflections of the Mountain*. Eds. A.-M. Blondeau, E. Steinkellner. Wien: Österreichischen Akademie der Wissenschaften. pp.59-75.

Macdonald, A.W.

- 1990 "Hindu-isation, Buddha-isation, then Lama-isation or: What Happened at Laphyi?" In *Indo-Tibetan Studies*. (Buddhica Britannica Series Continua 11) . Ed. T. Skorupski. Tring: Institute of Buddhist Studies. pp.199-208.

Mckay, A. eds.

- 1998 *Pilgrimage in Tibet*. Richmond: Curzon press.

O rgyan bsod nams and A bu dkar lo. eds.

- 2002 *Rma chen gangs ri gyi gnas yig*. Xining: mGo log khul yul skor cu'u dang rMa yul ge sar rig gnas ste ba.

何峰

- 1995 『《格薩爾》与藏族部落』青海民族出版社。

邢海寧

- 1994 『果洛藏族社会』北京、中国藏学出版社。

謝繼勝

- 1991 「戰神雜考」『中国藏学』1991-4、pp.42-73。

石泰安 (R.A.Stein)

- 1993 『西藏史詩与説唱芸人的研究』耿昇訳、西藏、西藏人民出版社。

丹珠昂奔

- 2001 『藏族文化發展史』上・下、蘭州、甘肅教育出版社。

内貝斯基 (R.Nevesky-Wojkowitz)

- 1993 『西藏的神靈和鬼怪』謝繼勝訳、四川、西藏人民出版社。

ナムカイノルブ

- 2000 『チベット密教の瞑想法』法蔵館。

注

- (1) チベットでは山に宿る神を「ユルラ (yul lha)」、「ジダク (bzhi bdag)」、「サダク (sa bdag)」などと呼称するが、ここでは便宜的にこれらの表現を一括して「山神」と呼ぶ。
- (2) Huber によれば聖地誌は、“瞑想や睡眠によって創り出された変性意識下にあるタントラ行者の「pure visions (dag snang)」による特定の景観の体験”(Mckay 1998, x) であり、聖域全体を様々な神仏のアイコンで充満する仏国土のイメージでつづった巡礼指南書である。
- (3) かつてアニ・マチェンに対して、この山を「ピータのひとつ」と見なすチョナン派僧の聖地誌を用いて分析を行なった Buffetrille は、実際の現場で観察される巡礼者の行動が「より古い習慣」(Buffetrille 1997, 112) に規定されており、サンヴァラ系儀軌の高度な象徴体系が巡礼者の行動パターンにほとんど影響していないことを明らかにしている。
- (4) ツォンカパは 1409 年、ラサ近郊にガンデン寺を与えられてゲルク派を創始した際、故郷のアムドからマジアル・ポムラを勧請し、これを護法神として使役する供食法を紹介した (内貝斯基 1993, 242)。
- (5) 14 世紀からゴロクの支配氏族となった Bru 氏が文化的に依っていたのは、中央では弱体化していたニンマ派の二次的拠点として発展したカムのデルゲ地方であり、これはゴロクで現在活動中の 52 座の寺院中、40 座以上がニンマ派の寺であることから理解される (刑海寧 1994, 154)。
- (6) 教派勢力と結びついたデムチョク・カルトの伝播を傍証するものとして、カム地方のジェクンド地方を拠点とするカギユ派の存在がある。この地方の信徒は数千キロの道のりもいとわず、ミラレパの事跡を慕ってカイラスまではるばる参集する事実がある一方、わずか数百キロ北に位置するゴロクの聖山アニ・マチェンにはほとんど関心を払わない。このことから、民衆信仰としてのデムチョク・カルトの及ぶ実質的な北限は、カムパとゴロクの境界となるバヤンカラ山脈であることが推察される。カイラスの巡礼圏については玉村 (1987) 参照。
- (7) 代表的な人格山の名称は以下：父山 bse ri gang yag, 母山 rdo rje drag rgyal ma, 弟山 dgra 'dul dbang phyug, 伯父山 zhang po brag ring, 后山 gong sman lha ri, 將軍山 dmag dpon g-yu rtse, 大臣山 dge tung blon po brag dkhar, 管財人山 gnyer ba mgron dgyes zhal dkhar.
- (8) リン・ケサル王伝：チベットの民間口承文芸。パドマサンバヴァの代理として天から人界に使わされた梵天の子ケサルを王といただく国、「リン (gling)」が、敵対する周辺諸国を仏法の名のもとに制圧していく過程を描く。世界最長の叙事詩と考えられており、分布の範囲はチベット全域のみならずパミール高原からモンゴルおよびロシア南部を経て東北中国の辺縁にまで及ぶ。その主要内容の多くは民間に往来する口承芸人によって広く民衆社会に語り継がれてきた。『アムド仏教史』(mDo smad chos 'byung) によれば、ゴロクを含む黄河源流域はかつてこのリン国の統治下にあったという (Brag dgon pa 1982, 234)。ゴロクはケサルにまつわる無数の伝承・史跡・聖跡を擁し、かつ著名な口承芸人を数多く輩出しているため、現在もゴロクの人々は自分たちをリン国の末裔であると自負している。
- (9) リン国三十将のひとり。ケサルが王となるまでは国軍の総帥の任にあった。名前からも知られるとおり漢人とのハーフで、母は漢王室の妃であるという。
- (10) 『蔵漢大辞典』によれば、四種法とは「息災：zhi」(人畜の息災、疾病・障害の消滅)、「増益：rgyas」(福利健康と福祿財富の増加)、「降伏：drag」(護摩・圧倒・投擲など、猛威の法により仏敵を誅滅すること)、「敬愛：dbang」(神・鬼魔・人を懐柔調伏し調和させること) の 4 つである。
- (11) 「地」とは菩薩の靈的成長段階を示す語である。七地以上の階梯は「不退転」の境地とされ、こ

—仏教は山に何をしたか?—

- れ以降は「大菩薩」と呼ばれて解脱への道を後退することはなくなるという（ナムカイノルブ 2000, 27）。
- (12) dgra lha の本来の字義は“敵を防ぐ神”であり、「戦神」「軍神」「御敵神」などこれまでさまざまに訳されてきた。ここでは本土チベットで出版されている漢文書籍において一般化している表現を用いた
- (13) las bzhi sgyu 'phrul rol pa'i sprin phung las // ris med 'gro la phan bde'i char snyil ba // sa bcu'i dbang phyug lha chen sbom ra rje'i // ...dgra lha'i rgyal bo mthu stobs dbang phyug che // sa bcu'i sems dpa' rma rgyal sbom ra nyid //
- (14) da ni shar phyogs ngo mtshar bkod pa la // chu dkar sna nas gling ri ser bo'i bar // shar du bzhugs pa'i zhi ba'i rma chen ni // sku mdog dkar la mdzes pa'i nyams chags shing // dbu zlum zhabs rjen chos gos sham thabs gsol // gseg shing thogs shing lhung bzed phyag tu bsname // dge slong cha byad bzhengs pa'i stabs su bzhugs //
- (15) de nas lho yi phyogs gyi gnas bkod la // gling ri'i mtsams nas rta mchog gong kha'i bar // lho la dbang mdzad rgyas pa'i rma chen ni // sku mdog dkar po phyag g-yas mdung dar dkar // 'phyar shing gyon pas nor bu thugs kur 'dzin // chibs su gser sga g-yu yi mthur spras pa'i // rta mchog ngang ser bcibs shing gzi byin ngang // lhun chags rgyal po bzhugs pa'i tshul gyis 'gying //
- (16) ノルブジャンドウルはケサルの異名。三十将軍とは天界帝釈天の宮殿に住む三十天将が地上に降誕したもの。五守舎神（'go ba'i lha lnga）とは生命体のうちに宿る郷土神・父族神・母族神・戦神・生命神の五神。十三戦神もまた人馬の身体につく守護神であるが、個別に独立した神としても崇拜される。これらの神格については謝（1991）を参照。
- (17) mdo khams gling gi bla ri ser bo gnas // rigs gsum sgyu 'phrul nor bu dgra 'dul la // dpa' rtul sum cu dgra lha bcu gsum dang // 'go ba'i lha lnga'i lha tshogs kyes bskor cing bzhugs //
- (18) 謝氏はウェルマを「矢先につく兵器神」としている（謝 1991, 47）。
- (19) mdun gyi bye ma 'bru de'u bya ba de // sna lnga'i 'bru dang nor bu'i phung bo yis // byur bur gtams pa'i gter gyi bum bzang ste // de rnams yi gar 'ong ba'i mchod pa'i rdzas // jo mo g-yang ra zhes bya tsa ri'i gnas // rgya gar 'phags ba'i yul gyi ta gi ma // mkha' 'gro bzang mo'i sgrub phug khyad 'phags dang // grub thob thang stong lha lung dpal rdor gyi // dbu dang phyag rjes la sogs mngon par gsal //
- (20) da ni byang gi gnas bkor 'di lta ste // dgra 'dul gnas nas chu dkar mchod rten bar // dgra po'i tshul 'dzin byang gi rma chen ni // mi dkar rta sngon mdung dar zhags pa 'dzin // dgra lha'i dpa' chas dag gis gun nas spras // dgra lha'i yang snying dgra 'dul dbang phyug ni // sku mdog smug nag phyag g-yas mdung dar 'phyar // phyag g-yon zhags pa nor bu'i gzhong ba 'dzin // gser khrab gser gyi rmog la ri dar brgyan // dgra lha'i chas dgu spras shing rta nag bcibs //
- (21) 「(わが愛騎) その右腹のつばには快速風戦神、左腹のつばには快速火戦神、背中に乗せた法輪には赤い馬頭金剛変化身、肺臓の白い雪山には自現護螺龍神がおり、肝臓の花石山には格卓寧波山神が現れる。上半身には異なる種類の五男神、前胴と後胴の境目には一筋の赤く輝く彩雲、綺麗にそろった白い歯には 360 の天神がついている」（丹珠昂奔 2001, 229-230）
- (22) これらのタームは、ヴァイローチャナ作と伝えられる前伝期の聖地誌でもアニ・マチェン巡礼の功德を表現する言葉として使われている。ヴァイローチャナの聖地誌については Buffetrille (1994) を参照。

—仏教は山に何をしたか？—

アニ・マチェン巡礼のルートと主要な霊跡 (①~⑯)

